

令和元年度第6回きのくにコミュニティスクールの推進に係る 研修会（東牟婁会場）

1. 日 時 令和元年12月2日（月） 13時30分～16時30分
2. 場 所 那智勝浦町体育文化会館
3. 参加者 学校教職員、学校運営協議会関係者、市町村教育委員会担当者 合計45名

4. ねらいと成果・課題

(1)地域に誇りを持つ子供を育てるために学校・家庭・地域が連携した、きのくにコミュニティスクールの活用について学ぶ

学校・家庭・地域が連携・協働するためには、まずお互いを知ることから始め、助け合える存在になった上で、協働へと進めていくことが大切である。より効果的な協働活動するためには、きのくにコミュニティスクールの仕組みを活用し、学校運営協議会において目標・ビジョンを共有し、具体的な活動の在り方等について話し合う必要がある。

(2)熟議を通して課題を具体的な取組にするためのプロセスを学ぶ

グループ協議において、課題や対応策を抽出し、それぞれのグループから意見をもらいながら検討することができた。しかし、具体的な取組にするためのプロセスを学ぶまでに至ることができなかった。

(3)地域内での学校間（異校種間）連携が進む工夫を学ぶ

他校種との合同学校運営協議会を行うことで、それぞれの校種から見た学校の様子や子供につけたい力や姿等について情報交流することができる。その際、異校種間の橋渡し役を担う学校運営協議会委員が司会をすることで、活発な意見交換ができることを学んだ。

(4)先進事例から自校で実践できる具体的なイメージをつかむ

取組を計画していく際には、「既存の取組を充実・発展させること」や「地域の率直な意見を取り入れながら少しずつ進めること」が大切であることを学んだ。

5. 研修内容 学校・家庭・地域が連携した取組 ～きのくにコミュニティスクールの活用～

◆実践発表1

「きのくにコミュニティスクールの実践から教育力向上の手立て」

串本町立出雲小学校 校長 山路 和彦 氏

(1)地域との連携について

学校運営協議会では「子供たちは人との関わりの中で育っていく」という思いを共有している。地域と連携した活動を通して、子供には三つの「あ」、あいさつ（コミュニケーション）、あとかたづけ（自主活動）、ありがとう（感謝）ができるように育ててほしいと考えている。



○行事を通じた人との関わり

（5月）運動会前の整備 （11月）グラウンドゴルフ交流会 （3月）卒業式

○防災学習

- ・区からの提案がきっかけで始まり、「自分の命を守る」というテーマで実施。
- ・学校運営協議会委員の提案で、今年度は「潮岬青少年の家」で実施した。コーディネーターが事業実施に係る連絡調整役を担い、関係団体等との連携を図っている。

(2)取組を通して

学校と地域の情報共有の体制構築ができた。また、学校に対する保護者や地域の理解、関

心が高まるとともに、教職員の意欲の向上にもつながった。

今後に向けて、学校運営の改善に資するPDCAサイクルの確立や社会に求められている力を育てる学校教育の実現、「地域とともにある学校づくり」の理解浸透を図る必要がある。

◆実践発表 2

「新翔高校のきのくにコミュニティスクールの取組について」

和歌山県立新翔高等学校 教諭 横嶋 希和 氏

(1)学校運営協議会での意見を受けて見直したこと

- 新翔高校への入学生も減少している中、昨年度の学校運営協議会では「魅力ある新翔高校にするために」をテーマに話し合いを持ち、高校からの広報活動や情報発信力が弱い等の意見が出た。そこで、今年度、情報発信の内容と方法の見直しを図った。



- ・中学生体験学習における広報の工夫

各体験講座のタイトルや内容を中学生が興味を引く文章にしたことで、定員20名に対し50名の申し込みがあった。

- ・学校紹介映像の作成

進学説明会等で「学校紹介」をする際に、動画を取り入れることで、参加者に学校の魅力をアピールすることができた。

- 学校運営協議会において「中学校との合同会議を開催し、高校への要望を聞き取ってみてはどうか」との意見に基づき、近隣の中学校2校と連携して協議会を開催した。

合同開催をしたことで、「中学校と高校の先生の情報交換の場が必要」「中学校のうちにつけておくべき力の共有が大事」等の意見が出された。それらを生かし、中高連絡協議会で情報交換の時間を設定することで、活発に意見を出し合うことができた。

(2)今後に向けて

- ・より効果的な情報発信（情報共有）の方法を検討する。
- ・意見を出しやすく、議論が深まる協議会の仕掛けづくりを行う。
- ・校区が広い中、効果的な地域との交流の在り方を検討する。
- ・生徒数減少の中、新翔高校の魅力を伝える方法を検討し、生徒数の増加を図る。

◆講演

「コミュニティ・スクールで育む子どもの未来」

日本大学文理学部教育学科 教授 佐藤 晴雄 氏

日本でのコミュニティ・スクールの導入経緯と現状について

- (1) 地域とともにある学校をめざすには、クローズドシステム（学校内完結）から、オープンシステム（人的・情報・物的の各資源の取り入れ）への意識改革が必要。

- (2) 学校支援活動の効果を認識している学校の児童ほど、全国学力・学習状況調査の平均正答率が高い傾向にある。
また、生徒指導上の課題についても、学校支援活動実施校の方が減少している。

- (3) 学校運営に対して保護者、地域等が意見を述べる意義は、①学校が自身の「知らざる面（盲点の領域）」を知る。②新たなアイデアが生まれる。③利害関係者のニーズをくみ取ることができる。④保護者・地域の当事者意識が高まる。⑤教職員の今後の教育に対する意識改革が進む。等がある。



- (4) コミュニティ・スクールの諸活動を通じた経験が、子供の成長に有益である理由として、①生活体験の豊かさは学びの向上につながる。②将来を考えるには豊かな経験が重要である。③地域の人から支えられた経験は地域理解と地域への愛着につながる。また、経験を促す方法としては、①特定事項や人生経験が豊かな人材による指導を取り入れる。②地域で行われている体験活動を活用する。③学校と地域が協働で体験活動を実施する。等がある。
- (5) 連携をめぐる諸課題としては、①地域・保護者の理解。②地域人材等の確保。③ボランティアへの対応。④予算・費用の不足。⑤教職員の負担増。等がある。

◆協議

「コミュニティ・スクール運営に関わる問題点と解決策」

日本大学文理学部教育学科 教授 佐藤 晴雄 氏

学校運営協議会を進める上での問題点を出し合い、「対応・解決策」を他のグループが提案するという手順で進めた。

- 「人材の確保は難しい」
 - ・教員のOBを活用する。
 - ・小中学校合同の学校運営協議会にする。
- 「教職員の意識に差が大きい」
 - ・全教職員が交替で協議会に出席する。
- 「学校運営協議会で活発な話し合いができる雰囲気をつくるには」
 - ・正直に学校の実態を伝える。



6. 参加者の声（アンケートより）

(1)学校運営協議会等関係者

- ・実践発表を聞いて、東牟婁地方では今後新しい動きが出てくると思った。未来を生き抜くことができる小学生・中学生・高校生の育成を願う。
- ・学校側のコミュニティ・スクール担当者を誰にするかがポイントであると思った。

(2)学校関係者

- ・実践発表を通して、勤務校でも参考にしたいアイデアや新たな気づきを与えてもらった。勤務校でも、もっと地域や小学校・高校と連携していけたらと思う。佐藤先生の講義を通して、理論的によく分かり、勤務校で取り組んでいることの意義が改めて理解でき、重要性に気付いた。
- ・情報発信の大切さ、情報交換の時間設定等、具体的な取組を教えてもらい勉強になった。特に連携の手順は大変参考になった。

(3)市町村教育委員会

- ・熟議ではいかに具体的な話ができるかがポイントではないかと思った。
- ・学校運営協議会委員の選定が大事であるとともに、教職員の理解も必要だと感じた。